

差櫛上十二枚  
下十二枚

〔元祿會我物語〕三帚掃除世話やかでよし茶屋座敷

まめつけ島田髪、先も跡も長みをなじ程にして、中程により髻を二筋かけ、中白繻子の疊帯、むすび先は一文字にして、庵形のさし櫛、姿見歸りの蹴出しあゆみ、略下

〔俗つれぐ〕四是ぞ姝背の姿山

落し懸の大島田、忍髻の上に中疊平結、先は一文字にして、庵形の插櫛に切金の折菊、略下

〔嬉遊笑覽〕容儀世の人心名書に、べつかうの總すかしのさし櫛と見えたり、天和貞享の透しの櫛

は、其後元文頃より、近く天明迄も行はれたり、彫工東雨安親は、奈良辰政が弟子にて出藍の譽あり、安親が女子に彫て與へたる透しの櫛あり、假鍮シチウにて形角なり、みねの所狭く、齒長し、おもてに水仙の折花をすかしに造りたり、安親は寛文中の生れにて、延享元年身まかれり、此櫛は寶永正徳頃にも造れる歟、

〔婿入記〕よめ入の條々

一くしの箱、くしのかす三十三あるべし、此内びんのくしあるべし、これはびんをけづり侍らむためなり、

〔類聚雜要抄〕四櫛篋一雙甲乙 同納銀 小宮納十二合、略中一合、差櫛二枚、金一疋

〔享保集成絲綸錄〕十九元祿十七申年二月

覺中略

一女のさし櫛、かうがいに金銀のかな物、無用に候、尤蒔繪類も結構成仕形無用之事、

右之通被仰出候間、急度可相守候、以上、

〔萬葉集九相聞〕石河大夫遷任上京時播磨娘子贈歌